

# 海外派遣事業報告書 2013

ベトナム・インドネシア



公益社団法人

北海道国際交流・協力総合センター

## 目次

研修事業概要	1
アルバム	3
団員レポート	5
国際協力研修団名簿	19
研修日程表	20
行動記録	21

# 海外派遣事業報告書 2013

---

## ベトナム・インドネシア

### 1 趣 旨

道内各地の青年を海外に派遣し、視察や関係者との意見交換などを通じて、本道との違いや地域社会のあり方などについて学ぶとともに、異文化や国際交流等に対する理解を深め、国際的な視点に立って地域づくりを進める人材を養成し、地域の国際化の促進に資する。

### 2 訪問国

ベトナム、インドネシア

### 3 派遣対象者

北海道の青年（20～45歳程度）

### 4 研修内容

国際協力の実態と効果的な協力事業のあり方や、経済交流や異文化交流について学ぶ機会とする。

- ・ 政府機関や JICA 事業の取り組み
- ・ NGO、NPO、日系企業などの活動状況
- ・ 子どもや青年との交流

### 5 派遣計画

- ・ 訪 問 先 : ベトナム、インドネシア
- ・ 派遣人員 : 7名（団長1名、団員6名）
- ・ 派遣期間 : 平成25年11月3日（日）～11月10日（日） 8日間

### 6 参加負担金

12万円

### 7 旅行主催

トップツアー株式会社





キークワン寺にて、孤児の受入支援の現場を視察  
(この活動には新潟国際ボランティアセンターが支援を行っている)



FFSC (ストリートチルドレン友の会) を訪問し、子ども達と折り紙で交流

## ベトナム

11月3日～11月5日



FFSCにて、日本から持ち込んだ野球用品で野球指導  
(交流で使用した道具はそのまま寄付した。)



JICAベトナム事務所にて、JICAにおける国際協力の取り組みについてレクチャーを受けた



ベトナム日本人材協力センターにて、日本の人材育成プロジェクトについてレクチャーを受けた

インドネシア  
11月6日～11月10日



JETROジャカルタセンターにて、インドネシアにおける経済成長の概要についてレクチャーを受けた。



JABABEKA工業団地を視察し、若手起業家からレクチャーを受けながら工場を視察



ダルマ・プルサダ大学にて、お互いの学生から文化紹介のプレゼンテーション



JICAインドネシア事務所にて、JICAにおける国際協力の取り組みについてレクチャーを受けた



ダルマ・プルサダ大学の学生と意見交換を行いながら夕食交流

## 平成 25 年度海外派遣事業について

海外派遣団団長

北海道国際交流・協力総合センター副会長兼専務理事 高橋 了

当センターでは、道内の青年を海外に派遣し、視察や関係者との意見交換等を通じて、異文化や国際交流、国際協力に対する理解を深めることにより国際的な視点を養い、地域づくりに貢献できる人材を養成するため、毎年、海外派遣研修事業を実施している。

今年度は、団員 6 名を公募し、11 月 3 日から 11 月 10 日までの 8 日間にわたり、ベトナム、インドネシアを訪問した。

両国は、近年、東南アジア諸国の中でも経済成長が著しい国として注目を浴びており、日系企業の進出や投資も増えてきていることから、インドネシアでは、日本大使館や JETRO を訪問し、インドネシアにおける経済状況や我が国の支援の内容について話しを伺った。また、国内初の民間資本による工業団地である、JABABEKA 工業団地を訪問した際には、4 名の日本人の若手起業家から話を伺う機会があったが、異国の地でのビジネスの成功に向け積極的に取り組んでいる若者の情熱的な姿に、団員も多いに刺激を受けていたようであった。ベトナムでは、JICA プロジェクトとしてスタートし、現在は独自に活動を行っている、ベトナム日本人材育成センターを訪問した。そこでは、ベトナム人に対し、日系企業で働くためのビジネス支援や日本語教育などを行っており、熱心に研修に励んでいるベトナム人の様子が見られた。両国とも日系ビジネスの今後の発展に期待が膨らむが、しかしその一方で、急激な経済成長に伴い、インフラ整備の不足（特に交通渋滞による物流の停滞）や現地従業員の人件費の高騰など、様々な課題を抱えていることも同時に伺い知ることができた。

また、今回は、ベトナムでは、FFSC（ストリートチルドレン友の会）、インドネシアではダルマ・プルサダ大学を訪問し、それぞれ子どもや学生との交流を行った。FFSC での交流では、団員自ら事前にメールなどで連絡を取り合い、折り紙や野球道具などを日本から持ち込んで、現地の子供達と一緒に楽しみながら積極的に交流を行っていた。また、ダルマ・プルサダ大学では、大学生の団員 3 名が中心となり、北海道の文化を紹介するプレゼンテーションを行ったり、YOSAKOI ソーランを披露したが、インドネシアの学生からも同様に文化紹介や YOSAKOI ソーランなどの演舞の披露があり、時間が尽きることなく大いに交流が盛り上がったところである。

国際協力の観点からは、ベトナム・インドネシアともに、JICA 事務所を訪問し、両国の現状や国際協力の必要性、また JICA の取り組みについてレクチャーを受けた。また、ベトナムでは、主に子どもの自立支援を目的に活動を行っている団体である、キークワン寺と前述の FFSC を訪問したが、団員の中には、将来、国際協力関係の仕事に就きたい、

または国際ボランティア活動をしたいという者も多かったことから、関係者の話や、実際の支援現場を目の当たりにすることで、将来の目標について参考になることも多かったものと思われる。

今年度に参加した団員は、大学生3名、社会人3名であり、男女別に見ても半々となっていたことから、全体的にバランスがとれた構成となり、夜にホテルでYOSAKOIソーランの練習を行うなど団員同士の一体感も生まれていた。団員は、今回の研修を通して、それぞれの研修テーマについて様々な印象を抱いたと思うが、同時に、仲間との問題意識の共有も図れたようである。団員一人一人の今後の活躍を期待するとともに、今回の研修を機に、仲間同士、是非これからも絆を深めていってもらえたらと思う。

当センターとしても今回お会いした日本大使館、JICAをはじめ、NGOや日系企業、大学など様々な関係者の方々と、今後とも連携を図り、当センターの国際協力や経済交流の取り組みを通じて本道の国際化の一層の推進に役立てていきたいと願っているところである。



## ベトナム・インドネシアでの派遣研修を終えて

齊藤 路子

1 1月3日の朝、直前まで仕事をして新千歳空港へ向かった。前日から風邪のため熱があったので、8日間の海外研修に耐えられるかとても不安だった。しかし、空港に着くとその不安は期待に変わった。ベトナムとインドネシアで色々なものを見たいと思った。

### 1 ベトナムでの研修（11月3日（日）～11月6日（水））

夜の10時にタンソンニャット国際空港に着いた。蒸し暑さと私には馴染のないベトナム語が飛び交う空港で異国に来たことを実感した。

翌朝、人口900万人のベトナム最大の都市ホーチミンは、多くのバイクで渋滞していた。カラフルなマスクとヘルメットを付けた通勤者の数に圧倒された。地下鉄や電車といった公共交通機関がないため、ベトナム人の主な交通手段はバイクだ。

フランス統治時代に建てられた歴史的な建築物と

人口の6割強が30歳未満という若者が多い町の様子を見ながらベトナムの歴史と将来を垣間見た気がした。

ベトナムについては、学生の時に授業で勉強したベトナム戦争の印象が強かった。戦争証跡博物館を訪れ、枯葉剤の影響による奇形児の写真や拷問の様子など目を覆いたくなる写真を見た。現実をあるがまま受け入れ、風化させず、平和を願うベトナム人の意思を感じた。

ストリートチルドレン友の会 FFSC(NGO)を訪問した。その施設では、家庭の事情で教育を受けられない子供たちに無料で教育を受けさせている。また、職業訓練もしており、バックや小物入れなどの商品の生産と販売をしている。この施設では単なる「援助」ではなく「自立」に重きを置いていると思った。貧困という負のスパイラルを断ち切るための手段は「教育」だと再認識した。教育を受ければ子供たちの将来の選択肢が広がる。日本の政府開発援助（ODA）のハード面によるひも付き援助は批判されることがある。確かに経済発展のためにハード面の空港や道路、橋などを整備することは必要だ。しかし、子供たちを見ていると、将来、ベトナムがさらに発展するためには「教育」というソフト面の支援も重要だと思った。

無邪気な子供たちと遊び終わった後は、久しぶりの運動で疲れ果てたがとても充実した時間だった。



ストリートチルドレン友の会の子供たち

### 2 インドネシアでの研修（11月6日（水）～11月9日（土））

首都ジャカルタの第一印象は高層ビルが立ち並んでおり、大都会だと思った。しかし、その一方で、錆びたトタン屋根の家々が並ぶ地区もあり、貧富の差を感じた。

また、イスラム建築物やブルカを被っている女性、街中でのストの様子などを見たときは、イスラム圏の民主主義国家であることを感じた。

ベトナムがバイク社会であればインドネシアは車社会であり、日本車のシェアは95%と高い。ベトナム同様、交通機関が発達していないインドネシアでは車の渋滞がひどく、滞在期間中はホテルに着くのはいつも深夜だった。

ジャカルタから東へ40kmのところにあるJABABEKA工業団地を訪問した。インドネシア初の民間資本の工業団地である。約30か国、1500社の企業が入居し、日系企業は約110社入居している。政府の出先機関、大学、病院、ホテルなどがあり、一つの都市のようだった。日系企業の工場を訪問して日本人経営者から話を聞かせていただいた。日本語で書かれた「報連相」や「整理整頓」の張り紙があり、日本の組織やモノづくりの精神が活かされていると思った。日本からインドネシアに進出した経緯や異文化の問題、その中で試行錯誤してきた事など貴重なお話を聞いた。

ダルマ・プルサダ大学で日本語を学んでいる大学生との交流は楽しかった。英会話やインドネシア語が必要だと思って電子辞書を持参したが、学生達は流暢な日本語で話しかけてくれたことに感動した。

彼らが将来、日本とインドネシアの繋がりをさらに深めてくれると期待している。また、自分も微力ながらその活動に関わっていきたいと思った。



ダルマ・プルサダ大学の学生たち

### 3 おわりに

今回の研修の訪問先では、日本に対して好感を持っていただいていることが嬉しかった。それも普段から日本大使館、JICA、JETROなどの政府関係機関や日本企業、NGOなどの援助及び相互協力などで信頼を築き上げてきた賜物だと思う。

アジアは言語、文化、宗教、政治体制など多様性に富んでいる地域である。それぞれの国が個性を持ち、違いがある。その違いを知ることが大切だと思う。日本は少子高齢化や市場の縮小など課題が山積している。若年層が多く、購買意欲が旺盛で、経済発展が著しいアジア地域を学び、人々と交流することは北海道経済や観光にとって重要だと思う。

そして、これからも外国語通訳ボランティアなどを通して北海道に居住している外国人の方や、北海道を訪れる外国人の方におもてなしの精神で接し、北海道の素晴らしさを世界にアピールして、北海道の国際化に関わっていきたいと思う。

## 私の出会いの8日間

佐藤 仁美

まず、私がこの研修プログラムに参加したきっかけについて、お話ししたいと思います。私は大学2年時に中国語が好きだったこともあり、中国へ短期留学に行ったことがありました。その留学で学んだことは、中国人の勉強に対する勤勉な姿勢と、英語の大切さです。留学時、中国語を上手にしゃべれない私にとって頼るべきコミュニケーションツールは英語でしたが、中国語はおろか英語もままならない自分の語学力を思い知らされる結果になりました。その経験から、異国の地に行くことで英語を使わざるをえない環境をつくり、自分自身を高めたいと考え、費用があまりかからないで海外に行ける方法はないかと探そうになり、行き着いたのが海外ボランティアでした。そこで、友人の誘いで何度かJICAの説明会やイベントに参加したことで、英語使用の有無とは関係なく、発展途上国でボランティアをすることに魅力を感じました。JICA研修員の体験者の方々の話を生で聴いているうちに、途上国の支援の現状を自分の目で確かめたいという思いが強くなったのと、将来、JICAボランティアの道を選んだ時にこの海外研修で学べる経験が足がかりになると思い、今回このプログラムに参加させていただきました。訪問国であるベトナム、インドネシアの2カ国ともに現地の子供たちや学生との交流の機会が設けてありましたので、そこを中心にお話ししていきたいと思います。

ベトナムでは、海外ボランティアの活動に直結した活動ができたことが私にとっていい経験となりました。それは、FFSC (Friends For Street Children: ストリートチルドレン友の会) が支援する子供たちとの交流の機会を頂いたときです。子供たちに教育を施すことで、社会で自立して生きていけるように支援するという会の方針には非常に感銘を受けました。なぜなら、私もこのような現場で実際にボランティア活動をしてみたいと考えていたからです。しかし、当初、私は子供たちと接する上で言語の面が一番心配でした。意志疎通はどうすればいいのだろうと悩んだ末、日本から持ち込んだ折り紙を使用する際、英語で書かれた折り紙の本も一緒に持ち込んだのですが、子供たちと実際に接していくうちに、そもそも言葉はあまり必要ないとわかりました。一日目に訪れたキークワン寺(障害福祉施設)を視察した時に施設を案内して下さったリンさんという方にも教えて頂いたことです。その施設では、水頭症で言葉は理解できてもしゃべれない子供や海外からボランティアに訪れる方がいるというお話を伺いました。言葉を介して意志疎通が困難な場合、どのように会話を行なうのか尋ねたところ、リンさんの返事はこうでした。「Body Language よ!」と。子供たちと触れ合っていると、その言葉は明白です。遊んでいるうち



ベトナムの子ども達と一緒に折り紙で楽しむ

に私の不安はなくなり、とても思い出に残る一日となりました。意外にも風船が好評であり、購入をすすめてくれた母に感謝しなければなりません。

インドネシアでは、ダルマ・プルサダ大学の日本語学科の学生たちと交流する機会がありました。これは、この海外派遣事業に参加したメンバー全員が口をそろえて「満足した。」と感想をもらしていたほどです。交流会の時には、私を含む3名の学生参加者は、現地の学生たちに北海道の紹介をプレゼンする任を任されていたので緊張しました。しかし、学生たちの反応は上々で、北海道の雪まつりのアニメキャラクターの雪像写真を見せたときに大いに反応してくれたので安心しました。多くの学生は、日本のゲームやアニメ、マンガをみて日本語を勉強し始めた子が多く、非常に親近感がわきました。特に、インドネシア、ジャカルタを中心に活躍しているAKB48の派生グループであるJKT48が現地でも人気があることを知ってうれしかったです。Lineやface bookのIDを交換してほしいと頼んできた学生が多かったのには、彼らの積極的な姿勢が感じられました。私も大学で言語を主に学んでいるということもあり、日本語学科長であるハリ先生と外国語の学習について一緒にお話しできたことは、非常に喜ばしい限りでした。例えば、日本のドラマや音楽をよく聞いている学生は、そうでない学生と比べて日本語の発音が上手であることなどを教えて頂きました。



ダルマ・プルサダ大学の学生と集合写真

人との交流や出会いは、なにも現地の子供たちや学生だけではありません。帰国後、私は大学のゼミの先生にこんな質問をされました。「他の参加者の人たちからは何か学んだりしなかったの？」と。私は海外との関わりをメインにこのプログラムの参加を考えてきたものですから、他の参加者の方々から何かを学びとろうなどとは考えてもいませんでした。しかし、年齢も違う、住んでいる環境も違う、このプログラムに参加しなかったら出会うことがなかった参加者の皆さんと共に生活することで、私は本当に一生に残る思い出を作りあげることができました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

## 海外派遣研修を終えて

佐野 玲

### 【はじめに】

正直なところ私の頭の片隅には「東南アジア＝発展途上国」という図式があり、上から目線で東南アジアを見ていた。でもそれは今回の研修に行く前の考え方である。帰国後、各種メディアでベトナム、インドネシアにおける経済関連記事が多いことに気付いた。海外派遣研修に参加した一員としてベトナム、インドネシアが今後どのような発展をとげるのか注視していきたい。

### 【都市環境】

ベトナム、インドネシアともにまず驚いたのはバイク交通量の多さである。電車や地下鉄等の公共交通機関の発達が遅れているため移動手段の大部分はバイクであり、両国民の生活の足となっているのであろう。一方で自動車の交通量も多く、高級車の数も少なくないが私はそこに両国の急成長と貧富の格差の一旦を強く感じた。



ベトナムの通勤風景

社会経済インフラはすべてこれからといった感じである。実際に日本のODAが電力、運輸、通信、下水道などで大きく支援しており、今後もこの支援は必要不可欠であり継続すると考える。

### 【経済】

ベトナムの国民一人あたりのGDPは約1,374ドル、経済成長率は5.9%（2011年）である。インドネシアの国民一人あたりのGDPは約8,466億ドル、経済成長率は6.2%（2012年）である。両国を訪問して感じたのは、ベトナム経済は今後も成長が続くと思えるがまだまだこれからとの印象が強い。一方、インドネシアは今まさに成長中であり非常に力強さを感じた。2010年以降一貫して年間6%を超える経済成長を維持していることでも証明されている。実際に日本からの直接投資実現額は、2010年：7.1億ドル、2011年：15.2億ドル、2012年：24.6億ドルであり、2012年は対前年比約62%増と驚異的な伸びである。この数字だけを見ても日本とインドネシアの経済における連携は必要不可欠であり、今後ますます重要度が増してくると考える。

### 【インドネシアが直面する課題】

前述したとおり、日本とインドネシアの経済における連携は必要不可欠であると理解し

ている。よって、以降はインドネシアに重点を置き報告する。インドネシアにおける経済関連課題は以下と考えられている。

- ・インフラ整備、法的不確定性の是正など投資環境の改善
- ・製造業の振興、付加価値の向上による輸出競争力の改善
- ・労働争議、最低賃金上昇への適切な対応
- ・補助金の削減を通じたインフラ整備、教育および社会保障の充実

この中でインドネシア（ジャカルタ）を訪問し身をもって体感したのが交通渋滞である。実際に本研修の訪問先への到着が遅れご迷惑をお掛けした次第である。後述する日系企業も港湾インフラの処理能力不足から精密機械が港に何日も放置され錆びてしまい使い物にならないトラブルや現地スタッフの賃金上昇など、すでに課題に直面している状態であり、今後の経済成長にマイナスを与えるのは確実に日本からの投資判断をも左右する状況である。

#### 【インドネシアで活躍する侍（サムライ）】

無論日本にも侍はいないであろう。しかし、日本から遠く離れたインドネシアで侍に出会ったのである。インドネシアの経済成長に乗り遅れまいと多くの大企業が進出しているが、我々が出会ったのは自動車関連産業をはじめとする製造業の中小企業である。「日本のマーケットは成熟しており今後の成長が期待できない」との理由でインドネシアに進出したようだ。驚くのが日本では大手自動車メーカーからの発注を受けているがインドネシアに進出する際に日本と同様に大手自動車メーカーからの発注を確約されていない点である。私の感覚では到底理解できなかった。何故そのような無謀と思われる行動ができるのか、一人の若き経営者に話を聞いた。彼は「今後成長の見込めない日本のマーケットにしがみ付いていても企業の成長はない。今後成長が見込めるインドネシアに進出しないほうがよっぽどリスクが高い」と言い切った。実際に契約件数は少ないながら受注を伸ばし確実に成長している。日本での技術に揺るぎない自信をもち、現地スタッフと汗をかきながら前だけを見て努力している。すでにインドネシアで我々には想像もできない困難を乗り越え頑張っている彼と別れる際に「頑張ってください」との言葉をためらった。若き侍がインドネシアで必ず成功すると確信した。

#### 【おわりに】

8日間という短い期間だったが、確実に自分の中で東南アジアを見る目はもちろん、日本と言う国に対しての見方も変わった。日本という国には本当に良いところがたくさんあることに気付かされた有意義な研修であった。今回の研修において実際に肌で感じたことを北海道の国際化の促進に微力ながら貢献できれば幸いである。

最後に今回の海外派遣団の団長であるH I E C C高橋専務理事をはじめ団員の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 将来の夢に向かって

多羽田 祥子

今回、ベトナムとインドネシアにおける海外派遣研修に参加させていただきました。8日間の研修で感じたことをここに記したいと思います。

私の将来の夢は海外でソーシャルワーカーとして働くことです。この研修を将来の夢を叶えるために有意義なものにするべく、まず、出発前に自分の研修における課題を設定しました。それは「海外で活躍する人の姿を実際に見て吸収する」「海外と日本の福祉の環境の違いを実感する」ことでした。

11月上旬の北海道は肌寒く、雪が降っている地域もあるなかで、20度以上気温差のある暖かい国へと出発しました。ベトナム・ホーチミンと日本の時差は2時間。空港からでた瞬間の南国らしい空気と異国の香りに圧倒されました。夜中に着いたので夜景がとても綺麗でした。私たちが宿泊したドンコイ通りは日本で言う銀座のような場所だそうで、夜中でも明るい街でした。次の日から研修が始まりました。最初に視察したキークワン寺は私にとって興味深いものでした。日本には宗教と福祉が結びついた施設はあまり多くありません。さらに職員はほとんどボランティアだそうで、ほぼ無償で働いているのです。これは日本人の私たちにはなかなか理解し難いものですが、これがこの実情なのだと思います。キークワン寺には障害がある子供たちだけではなく、身寄りの居なくなってしまう子供たちのケアも行っているそうです。そういった意味で子供たちの心のケアも大切な課題であるなど感じました。施設の2階は無料の授業を行っている教室で、子供たちが熱心に、かつ楽しそうに授業を受けている姿が見受けられました。子供の笑顔を見るのは本当に幸せな瞬間で、将来私も人の笑顔をサポートする仕事をしたい、と強く実感しました。

また、ホーチミンで印象に残っていることは、戦争証跡博物館です。教科書でしか学んだことがなかったベトナム戦争がリアルに伝わってきました。戦争に使われた兵器や、枯葉剤の影響を受けた人々の写真など、目を背けたくなるようなものが多く展示されていました。こんなに悲惨な状況がかつて実際に起こっていたと考えると本当に心苦しかったです。しかし、この博物館には多くの外国人が見物に訪れていました。地元の方はもちろん、私たちアジア人や欧米人も多種多様な人々が悲しみを忘れないようにここに来るのです。それこそがこの博物館の役割だと思いました。展示物の説明も色々な言語で訳されていて、世界中に向けて悲しい歴史を発信しているのだと感じました。

ホーチミンの4日間があっという間に過ぎ、ジャカルタに移動しました。ジャカルタの気候はホーチミンよりも蒸し暑く、乾燥している印象でした。空港をバスで出発して、驚いたのは日本車の多さ。約9割が日本車だそうです。さらにジャカルタには地下鉄がなく、電車も発達していないので、車の数が非常に多いです。そのため、ひどい渋滞が起こるの

です。私たちも巻き込まれ 40 キロ弱の道のりに約 2 時間 30 分もかかってしまいました。地下鉄は建設中だそうですが、この交通渋滞の問題は早急に解決するべきだと思います。

研修最終日にはダルマ・プルサダ大学の日本語学科の学生との交流がありました。交流の場では私たちがよさこいと北海道を紹介するプレゼンをすることが決まっていた。特によさこいは私がホテルで皆さんに踊りをレクチャーしたので、緊張しつつも楽しみにしていました。プレゼンもよさこいも学生の皆さんがリアクションをとってくれ、とても良い雰囲気の中、発表することができました。その後、食事会がありました。バリ料理を皆さんでいただきました。日本では食べられない香辛料や独特な辛さは初めて食べる味で刺激的でしたが、おいしかったです。また私も大学生ということもあり、年齢が近いので楽しく話すことができました。さらに日本語学科の学生たちなので、日本語が流暢で積極的に話しかけてきてくれ、本当に嬉しかったです。日本に帰ってきた今でも連絡を取り合う友達もできて、貴重な時間だったと思います。



インドネシアの学生に YOSAKOI ソーランを披露

ベトナム、インドネシアから帰国して約 1 ヶ月が経ちます。あっという間に時間が過ぎていきますが、今回の旅は沢山の刺激を与えてくれたことを本当に感謝します。海外で働くという夢も、現地でさまざまなものを見たことによってより明確なものになったと思います。しかし、自分の中で多くの課題も見つかりました。研修を通して見つけた課題もしっかりと受け止め、これからどのように改善すべきか、考えていきたいと思います。これから私は大学を卒業し、社会に出ますが、大学生のうちにこのような研修に参加できて本当に幸せだと感じます。学生という立場から世界を見て、考えさせられることが多々ありました。地元北海道と世界をつなぐ架け橋のような存在になれるよう、これからも一層努力していきたいと思います。有意義な時間をありがとうございました。



研修で出会った仲間達と



地球温暖化問題・リーマンショックなど、昨今経済成長の妨げとなる事柄に揺れている先進諸国。そして、そこに住んでいる我々日本人。経済的に頭打ちといっても過言ではない日本の現状を冷静に捉え、そのような不安要素を見直す必要が今を生きる我々に求められている。今後、日本が今以上の経済成長をしていくためには、開発途上国と呼ばれる国々との連携が必要と考えられる。それらの国々と手を取り合っても成長していくと考えるのであれば、その現地で暮らす人々の文化などを理解していくことは重要になってくるであろう。今回の研修ではベトナム・インドネシアの2カ国に訪問し、これら開発途上国と呼ばれる国々の政府・民間企業を通して、様々な視点からの意見及び解説を拝聴することが出来た。また、現地の方々との交流で文化・習慣なども体験させていただいた。

私は日本を含め、世界各国の「教育」に関心を抱いている。「教育」というものは、次代を担う「人材」というよりは「人間」自体を育てていくものであると私は解釈している。ここで、どうして「人材」と「人間」を使い分けたのかは後述する。この「教育」というものが経済と密接に結びついているのではないかというのが私の見解である。「教育」の大部分は学校教育で培われるといっても過言ではないと私は考える。日本で云うなら、少なくとも義務教育期間に朝から夕方までの時間、学校にいるわけであるから家族という時間と同じくらいかそれより多くなるであろう。部活動を行なっていればさらにその時間は長くなる。そして、義務教育に関して我が国は大部分の費用を負担しており、就学率もほぼ100%という水準である。しかし、世界的にみるとこれは当たり前の環境ではない。これは今回訪れた二カ国でも異なることをみると理解できる。

まず、ベトナムに於いては期間が異なり、小学校5年・中学校4年の5・4・3・4制が取られている。年度も異なり、主に9月～8月で2学期制が取られており、義務教育期間が6歳から15歳の9年間となっているが、現実には小学校5年間の就学しか受けられない方も多い。今回の研修では、まず障害福祉を行っているキークワン寺に訪れた。ここでは障害を持って産まれてきた子、貧しさなどの理由で学校に通えない家庭の子など様々な子どもたちを受け入れて教育を行なっている。教師もボランティアで教鞭を揮っており、教室もきちんとされて設備としては申し分ないものであった。その後、ホーチミンのストリートチルドレン友の会(FFSC)に訪れた。ここで、いただいたお話によるとホーチミンのような出稼ぎ地帯に来ている労働者は住民票を持たない・持てない家庭も多く、その方々は公的援助も受けられない、よって学校に行けないという貧困による負のサイクルに陥っている現状があるとのことであった。また、そのような環境で暮らしている親も相応の教育を修了していないことが多いため、教育について重要視していないことも問題となっている。

インドネシアに於いては日本と同様に6・3・3・4制が取られている。しかし、年度が7

月～6月の2学期制が取られており、日本と異なる部分も存在する。ここでも、統計的に小学校は就学率がほぼ100%であるが、中学校に至っては首都ジャカルタ周辺や他の大都市でのみ高水準である現状だ。政府(国家教育省をここでは指す)は2008年までに中学校を完全義務化にする計画を立てたが、日本のような完全義務化にはまだ至っていない。今回の研修でJETRO ジャカルタセンターに訪れた際、インドネシアの労働人口の5割が小学校まで、3割が高卒以上の修了というお話もいただいた。また、小学校の教師に関しても10%程が高卒以下で勤めているとのことであるため、これらから教育のレベルも決して高くないことが伺える。また、JABABEKA 工業団地でも3つの日系企業の代表の方々からも貴重なお話をいただいた。ここでは主にこれらの企業で勤める労働者が受けてきた教育について、日本の教育との違いで生じる問題について質問を尋ねた。インドネシアの教育水準は日本より低く、日本と比べると一つ下の学校教育と同等程度(中学校で小学校、高等学校で中学校という意味で)とのことであった。企業で独自にテストを行い本来は90%以上を合格としたいが70%程度で合格としたり、ジャカルタから高学歴の方を選抜したりと企業側も現地の雇用に関しては慎重な様子であった。ゴミのポイ捨てや歩きたばこなど日本では敬遠されているようなことを多くの方がすることから、働くためのモラルも問題となっている。これらは学力格差が非常に大きいことから起きることで、教育はやはり今後のキーとなると彼らも口をそろえて賛同していた。

このように僅か3カ国の教育を比べただけでもその国の特色が存在している。有意な差という統計的な値では測りきれないものの、教育は経済の発展とともに水準が上がっていくことが感じられる。ここで、前述した「人材」と「人間」の話を取り上げたい。日本は先進国と呼ばれる今、「人材」として仕事のスキルアップは必要不可欠であるが、先日決まった東京オリンピックでも使われた言葉「おもてなし」の精神を重視することでもわかる通り、国の文化を重視した「人間性」で勝負して勝ちえたことが結果としてある。これら開発途上国では「人材」としての教育は進んでいる一方、「人間性」を育てていく段階ではまだ制度上の甘さが感じられる。「教育」の最終目標は「人間らしさ」を持てるかどうかなのではないかと私は考える。

本研修でお世話をしていただいた関係各所の皆様、団長含め団員の皆様、HIECCの皆様  
に厚く御礼申しあげます。

## ベトナム・インドネシア両国の可能性

山下 裕由

### 1. 参加した目的

私は現在滝川市にある一般社団法人滝川国際交流協会で、国際交流専門員として勤務しています。

当協会では、独立行政法人国際協力機構（JICA）等からの外国人研修員受入や、外国文化交流イベント等の実施を通し、国際交流・国際協力事業に取り組むことで、地域活性化に努めてきました。

今回は、JICA 事業等の研修員受入を行う中で今後求められる分野や技術のニーズの理解や両国の現状把握と観光分野の成長可能性理解のため、また当協会で1月に予定し、高校生 5 名からなる「第5回ベトナム・カンボジアスタディーツアー」を実施するに際し、引率を担当することになったため、その事前研修としても活用させていただきたいと考え、今回、本事業に参加させていただきました。

### 2. 3回目のベトナム…。変化と課題

私は2008年、2009年にベトナムを訪問し、今回が3回目の訪問となりました。前回訪問した際と比較すると、町中を走る車が2倍以上に増加していることに驚きました。以前は、旅行者がチャーターした車が大半を占めていましたが、今回の研修中見かけた車はベトナム人が所有しているであろうものが目立ち、市民の移動手段の一つとして、広まり始めていることを実感しました。

以前は、交通インフラが整備されておらず、交通ルールがほとんど守られていない上、設備も整っておらず、信号機はホーチミン市内でも2～3つくらいしかなく、赤信号でもほとんどのバイクが停車しない、ヘルメットもせず4～5人が同じバイクにまたがるなどほとんど無秩序な状態でした。しかし、法律の整備により大部分が改善されており、大変驚きました。

しかしながら前述した通り、富裕層が増加し個人所有の車が増えたことにより、渋滞が今後の課題になってくるとのことでした。そこで日本や各国からの援助を得て、ホーチミン市から東西南北に沿線を伸ばす地下鉄の建設を進めているそうです。今後はベトナム人による保線や運行管理・乗客管理など鉄道関連の技術が求められるのであろうと想定されます。

ホーチミン市では、著しい成長と華やかさに非常にインパクトを受けました。しかしながら、当協会で受け入れている農業研修員が住んでいる地方の農村地区では、今でもその日に食べるものにも窮する状況に置かれている人たちがいるということは忘れてはいけない事実だと思います。

そのような地方にある農家の生計を向上させるためには、生活基盤となる農業や酪農・漁業など技術の底上げが不可欠であると強く感じました。特に市場やスーパーに並んでいるジャムやジュースなどの農産物の加工製品のほとんどは外国産で、せっかく自国にある果物や野菜を生かした加工品をつくるメリットは非常に高いのではないかと思います。

### 3. インドネシアの経済状況

初めて訪問したインドネシア共和国の首都ジャカルタでは、大小問わずどんな道路でも渋滞が発生しており、普通なら 5~10 分程度でたどり着くような場所でも、毎回 2 倍、3 倍以上の時間がかかることがありました。

バスの車窓から望む景色には、高級住宅街と低所得者が暮らす壁もないような家がすぐそばに立ち並んでおり、同じ土地に住んでいながらこのような格差が生まれたことに対して、どのような気持ちで生活しているのだろうかと考えると心が痛くなりました。

インドネシアに海外進出している日本企業を視察させていただいた際には、代表の方から「インドネシア人は購買意欲が非常に高く、買いたいと思ったらすぐに買ってしまう。時として非常に高価なものでも躊躇なく購入してしまう」とのお話をお伺いしましたが、今回私たちが訪問したデパートやホテルで見かけたインドネシア人も、最先端のファッションに身をつつみ、最新のスマートフォンを持ち歩いている人たちがほとんどでした。

またジャカルタでは今、労働賃金が急激に上昇しているようで、ここ 1 年間で最低賃金が 1.5 倍に跳ね上がっていながらも労働者によるさらなる賃上げ要求のデモやストライキは続いています。これからも労働賃金の上昇が続くことで、近い将来、中間層・富裕層の割合が大幅に増えると予想されることから、インドネシア国民の購買意欲は今以上に高くなると予想されます。



ジャカルタ市内で頻発している賃金アップのデモ

### 4. 研修ニーズと今後の課題

JICA など研修員のニーズについては、両国の JICA 事務所の訪問等を通し、今どのような技術が求められているのかをイメージすることができました。インドネシアでは米の 3 期作が可能であるにもかかわらず、依然として生産量が消費量に追いついていないと知り、農業技術は今後も課題になっていくのだろうと感じました。今後も人口増加が続き、米消費量は増加すると予想されているそうですが、農業生産性向上を、急激に改善することはあまり期待できないことから、自国の農産物生産の限界を見た大統領は国民に「米の代替に小麦を食べるように」と呼びかけているそうです。

確かに両国では、災害やインフラに対する技術移転が注目されていますが、両国が今以上に発展するためには、都市部の住民のための投資に重点が置かれつつありますが、明日の食べ物にも困っている貧困層といわれる人たちの状況を理解し、課題を解決していくのが優先課題であると私は考えます。まずは、貧困層の人々は自給自足の生活を行っていることから比較的浸透しやすいであろう農産物の増産や品質向上などの農業技術、生産した農作物を適正な価格で販売することができるマーケット知識、適切な知識を身に付けることができる教育など基本的な知識こそが、国の力を引き出すカギとなると考えました。

今回、このような機会を与えていただき、各方面への調整手配等をしていただきました HIECC の皆様をはじめ、日頃業務が大変お忙しい中、私たちを受け入れて頂きました現地関係各所の皆様に改めて深く御礼申し上げます。

## 海外派遣研修団員名簿

(五十音順)

No	氏名	性別	職業	
団長	高橋 了	男	団体役員	北海道国際交流・協力総合センター副会長兼専務理事
団員	齊藤 路子	女	公務員	
〃	佐藤 仁美	女	大学生	
〃	佐野 玲	男	会社員	
〃	多羽田 祥子	女	大学生	
〃	中野 大介	男	大学生	
〃	山下 裕由	男	団体職員	
添乗	亀田 文恵	女		トップツアー株式会社

## 平成25年度海外派遣事業スケジュール

### 【派遣国】ベトナム、インドネシア

日次	月日・曜日	都市名	時 間	交通機関	内 容	宿泊地
1	11月3日 (日)	新千歳空港 →ホーチミン	11:30 13:15 14:55 17:55 22:40	JL3042 便  JL759 便	新千歳空港集合 新千歳空港発 成田空港着 成田空港発 ホーチミン着	ホーチミン (ボンセンホテル)
2	11月4日 (祝)	ホーチミン	9:00 午後	専用車	キクワン寺視察 (障害福祉) 市内視察 ・統一会堂 ・戦争証跡博物館 ・サイゴン大教会	ホーチミン (ボンセンホテル)
3	11月5日 (火)	ホーチミン	9:00  14:00 15:15	専用車	FFSC(NGO)訪問 子どもとの交流 JICA ベトナム事務所 ベトナム日本人材協力センター	ホーチミン (ボンセンホテル)
4	11月6日 (水)	ホーチミン →ジャカルタ	10:00 13:00 午後	VN631 便  専用車	市内視察 ・独立記念塔 ・大統領官邸 ・モスク	ジャカルタ (ホテルメラワイ)
5	11月7日 (木)	ジャカルタ	10:00 13:00	専用車	JETROジャカルタセンター JABABEKA 工業団地視察 ・若手中小企業事業者との懇談 ・大学他学園施設訪問	ジャカルタ (ホテルメラワイ)
6	11月8日 (金)	ジャカルタ	9:00 11:00 15:00 19:00	専用車	日本大使館訪問 JICA 訪問 ダルマ・プルダ大学訪問 大学生との交流 夕食会	ジャカルタ (ホテルメラワイ)
7	11月9日 (土)	ジャカルタ  ジャカルタ	  21:25	  JL726 便	グループ (自主) 研修  ジャカルタ発	機 内
8	11月10日 (日)	  →新千歳空港	6:35 10:20 12:00	 JL3041 便	成田空港着 成田空港発 新千歳空港着	

## 行 動 記 録

日付	発着・滞在地	交通機関	内 容
11/3(日)	<p>新千歳空港 集合</p> <p>新千歳空港 → 成田空港</p> <p>成田空港 →</p> <p>タンソンニャット国際空港 (ホーチミン) 【ベトナム入国】</p> <p>ホテル (BONGSEN HOTEL)</p>	<p>JL3042</p> <p>JL759</p>	<p>11:30 新千歳空港 国内線ターミナル (2F) JAL 国際線乗り継ぎカウンター前に集合。 ・団長から「仲良く、実りの多い旅になるように」との言葉。</p> <p>11:50 チェックインを済ませ、各自昼食。</p> <p>12:50 手荷物チェックゲート内にて待ち合わせ。</p> <p>13:20 JL3042 にて成田空港へ向け出発。</p> <p>14:55 成田空港到着、出国手続きを済ませ、各自自主行動。</p> <p>17:50 JL759 にてベトナム・タンソンニャット国際空港へ向け出発。【約6時間30分】</p> <p>22:20 【現地時間】タンソンニャット国際空港到着。 ・出発時の北海道よりも20度近く暑く、湿度の高い空港に驚いた。 ・空港出口では大勢の人々が夜中にも関わらず、集まっていた。 ・深夜のため、交通量は多くないとガイドのタオ氏から説明があったが、札幌とは比べ物にならない程バイクと人の数が多かった。</p> <p>23:15 ホテル到着。翌日のスケジュールを確認後、解散。</p>
11/4(月)	<p>ホーチミン市</p> <p>キークワン寺</p>	備上バス	<p>8:00 ホテルロビーに集合。キークワン寺に向け出発。移動中ガイドのタオ氏よりベトナム、ホーチミン市の現状について説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベトナム最大の都市ホーチミン市の人口はベトナム全体の10%の900万人が住んでいる。</li> <li>・地下鉄、電車が無いホーチミン市の朝の通勤時間帯は、カラフルなマスクやヘルメットをした通勤者のバイクで溢れている。日本製のバイクが多かった。</li> <li>・2008年12月1日から法律が施行され、大人3人以上、子ども2名以上の乗車は禁止となった他、ヘルメットの着用が義務化となった→違反が見つかった場合は罰金。</li> <li>・現在 JICA のプロジェクトでホーチミン市内に地下鉄を建造中である。</li> <li>・電線が町中に広がっており、外観の悪さから、昨年ベトナム政府が東にまとめる政策を出した。東になっているものは衛星放送のケーブルで、電線はその上の1本しかない。</li> </ul> <p>8:50 キークワン寺到着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホーチミン市の住宅街の一角に厳かに聳え立つ立派なお寺。</li> <li>・子ども達を育てている施設は寺の反対側にある。</li> <li>・現在150名の孤児を受け入れており、水頭症、精神障害、盲目、ダウン症など身体にハンディキャップを持った子どもたちや生まれたばかりで親に捨てられた子ども達が暮らしている。</li> <li>・子ども達の学費については寺への寄付金でまかなっており、ここで働く25名の先生はほとんど無給で勤務している。</li> <li>・訪問当日も地元の大学生をはじめ日本や欧米からのボランティアが子どもたちと交流していた。</li> <li>・お寺の2階には図書館と教室があり、先生1人につき2つのクラスを担当している。</li> <li>・普通の学校に通っている近所の子ども達も、無料で受けら</li> </ul>

	<p>ベンタイン市場</p> <p>サイゴン大聖堂</p> <p>中央郵便局</p> <p>統一会堂視察</p> <p>戦争証跡博物館</p> <p>ミスター・アオザイ</p> <p>ホテル (BONGSEN HOTEL</p>	<p>れるこちらの教育を塾として活用している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教鞭をとっている先生方の中には、将来教員を志望していてボランティアでここの教育を行なっている人もいる。</li> <li>・案内役のリンさんから、言語障害のある子供たちとはボディランゲージで会話を行なっていることを教えて頂いた。</li> <li>・帰り際に子ども達から歌のサプライズプレゼントがあった。</li> </ul> <p>9:50 ベンタイン市場に移動</p> <p>10:20 ベンタイン市場到着、自由行動。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1914年に完成したホーチミン最大の市場。伝統様式により建設された巨大な堂の中に個人商店がひしめき合っている屋内市場。観光客向の店だけではなく、日用品や食料品を売る店多い。</li> </ul> <p>11:00 レストラン「TIME Restaurant」にて昼食。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フォーや生春巻きなどを堪能。</li> </ul> <p>14:40 サイゴン大聖堂、中央郵便局視察。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サイゴン大聖堂は、1880年に建設された2つの尖塔を持つ、赤レンガ造りの優美な教会。</li> <li>・フランス統治下で全てフランス製の材料を持ち込み建設された。現在もクリスマスや結婚式で利用され、朝の5:00~6:00にはミサも行われている。</li> <li>・中央郵便局は、1891年に建設され、観光名所化され、売店などが立ち並ぶが、現在も郵便局としての機能を果たしている。</li> <li>・ベトナムの郵便局は年中無休で、シフト制で勤務している。</li> </ul> <p>15:40 統一会堂視察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争と平和の象徴であるこの建物は、大きな壁と門に囲まれていて、中に入ると中央に噴水があり、端には戦時中に使われた戦車が展示されていた。</li> <li>・1884年にフランス領インドシナ連邦に編入されたこの国は、フランスの植民地支配の影響を大きく受けたことが伺えた。</li> <li>・建物の中には、内閣会議室、宴会室、作戦会議室、大統領室などがあり、壁には象牙品などが展示されていた。</li> </ul> <p>16:00 戦争証跡博物館視察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・建物の前には、戦争で使われた戦闘機の数々が展示されている。</li> <li>・観光客の姿が多く、特に西洋人の観光客の姿が多く目立っていた。</li> <li>・一階から四階までの建物であり、一階には戦争をモチーフにした子供たちの絵などが飾られていた。二階と三階には、戦争で使用した実際の銃が多く展示されている。四階では、実際に枯葉剤の影響を受けた方、特に子供や赤ちゃんの写真が飾られており、戦争の悲惨な状況を物語っていた。日本でも有名なベトちゃんドクチャンの写真もここで展示されている。</li> </ul> <p>14:50 観光客向けのお土産屋でショッピング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一階が刺繍を施した商品が並び、アオザイのオーダーメイドも行なっていた。観光客向けということもあり、値段は比較的高い。</li> <li>・二階がお菓子やお茶などの売り場になっている。</li> </ul> <p>18:10 レストラン「Le Cordon Blue」にて夕食。</p> <p>21:30 ホテル到着後、自主行動</p>
--	--	--



11/5(火)	<p>ホーチミン市 FFSC</p> <p>FFSC ビンチュウ センター</p> <p>ロッテレジェンドホ テル</p> <p>JICA ベトナム事務所</p> <p>ベトナム日本人材協 力センター</p>	備上バス	<p>8:45 ホテル出発、ホーチミン市近郊のFFSC事務所へ向かう。</p> <p>9:00 FFSC事務所を訪問。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ご主人の仕事の関係で、ベトナムで生活している池田さんと通訳のロアンさんから事業について説明を受ける。</li> <li>・FFSCは1984年にベトナム人ジャーナリストのチャン・バン・ソイ氏が設立し、自宅を事務所に改築後、活動を始める。縫製・刺繍科という2つの能力開発センターを設立。</li> <li>・ベトナムでは公立学校の授業料はかからないが、制服や教科書代については、別に支払わなくてはならない。多くの貧困層の家庭では、制服や教科書代が支払えず学校にいけない子供たちが大勢いる。</li> <li>・教育が受けられないことで、親と同じ貧困にあえぐ人生を生きていかななくてはならないという負のサイクルに立ち向かうために、FFSCセンターが7か所設立されている。</li> <li>・小学校卒業まで無料で教育を受けさせている。子ども達には教育の重要性を伝え、大学卒業まで奨学金制度なども準備し支援している。</li> <li>・また、子供だけではなく、親に対しても教育に関する啓蒙活動をしている。</li> <li>・施設の収入源はイギリスの石油会社が社会貢献として寄付してくれる他、里親制度、職業訓練品の販売、ゲストハウスの宿泊料など。</li> <li>・日本から医者、歯科医師がボランティアで健康チェックをしている。</li> </ul> <p>10:00 FFSC ビンチュウセンターへ移動。</p> <p>10:20 FFSC ビンチュウセンター到着、子どもたちとの交流を始める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シスターのタオさんをはじめとする職員が寄宿棟に寝泊まりする33人の子どもたちのお世話をしている。</li> <li>・訪問当日は、2年生20人が我々を出迎えてくれた。</li> <li>・団員の持ってきた野球道具、ボール、風船、折り紙などで交流を行った。</li> </ul> <p>11:30 シスターのタオさん手作りの昼食</p> <p>12:30 ビンチュウセンター内視察</p> <p>12:42 ビンチュウセンター出発</p> <p>13:20 ロッテレジェンドホテルにて休憩。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ロッテレジェンドホテルは韓国資本のホテルであるが、内装のあまりの豪華さに一同驚愕。</li> </ul> <p>14:00 JICA ベトナム事務所訪問。豊田雅朝氏からベトナムの状況について説明を受ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・JICA ベトナム事務所では、技術協力もさることながら、着工が始まったばかりのホーチミン市の地下鉄等、ODAにも力を入れている。</li> <li>・サッポロビールがロンアン省に自社工場を構え、着実にニーズを増やしつつあるなど、日本企業の進出もここ数年増えている。</li> </ul> <p>15:20 JICA 事務所出発</p> <p>15:35 ベトナム日本人材協力センター訪問。JICA 専門家として勤務している若林勇飛氏から、センターで行っている事業の説明を受ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベトナム日本人材協力センターは外国貿易大学を母体とした組織である。ビジネスコースと日本語コースの2つの研修コースを備えており、ビジネスコースでは日本人・ベトナム</li> </ul>
---------	--	------	---

	ホテル (BONGSEN HOTEL)		人それぞれの講師が主に企業の職員を対象に日本の企業で重要視されている「ほう・れん・そう」や5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）などの講義・研修を行っている。 ・日本語コースでは、日本語上中級者対象に、日本語能力テスト対策研修を実施している。 18:00 レストラン「Song Ngu」にて夕食 19:30 ホテル到着後、よさこいの練習。
11/6(水)	ホーチミン市  ジャカルタ市    モスク  大統領官邸 独立記念塔   ホテル (ホテルNEO)	備上バス  VN631	7:30 ホテルロビー集合 8:04 空港到着 10:00 VN631 便でインドネシア・ジャカルタへ向かう。 13:00 インドネシアのスカルノ・ハッタ国際空港到着。 ・ベトナムは湿気を含んだじめっとした気候だったが、インドネシアは太陽の日差しがベトナム以上に強く、じっとしていても汗が滴り落ちるほど。体感的にはインドネシアの方が暑いように感じられた。 14:00 ガイドのアムソリさんと合流。 ・アムソリさんは、74才の現役ガイドで、豊富な知識と経験を持っている。 14:15 各視察先に向けてバスで出発。 ・インドネシアは渋滞がひどく、どの道を通っても渋滞につかまってしまう。アムソリさん曰く、急激な経済成長に伴い個人の車の所有者だけでなく、港から荷物を運ぶトラックなど大型車の台数が急激に増えたため、政府のインフラの整備が間に合わず、渋滞が発生してしまうのだという。 ・政府は今後の渋滞緩和策として、自動車の利用時間を固定する等の提案を行っているが、現在のところ大きな動きはない。 15:19 モスク視察【車中】 ・1987年に建築され、一度に15万人収容することができるアジア最大のモスクであり、外観も一切汚れなどがみられず、大変大事にされていると感じた。 15:23 大統領官邸視察【車中】 15:25 独立記念塔視察【車中】 ・1961年にすべて大理石で建設され、全長237mある。インドネシア国民にとって、誇り高いシンボルのような塔である。 19:00 レストラン「ハンダヤニ・プリマ」にて夕食 20:00 ホテル到着後、よさこいの練習
11/7(木)	ジャカルタ市 JETRO インドネシア 事務所	備上バス	9:15 ホテルロビー集合。 9:55 JETRO インドネシア事務所視察。 ・副代表の田中利男氏より説明を受ける。 ・インドネシアは中間層の増加に伴い今年からシンガポール空港からの定期便も就航した。 ・2013年の最低賃金は前年比44%上がっており、インドネシアに進出している日系企業にとっては頭が痛い問題となっている。 ・現在インドネシアに進出している日本企業は1200を超えているがそのほとんどがジャカルタ周辺で商業活動を行っている。 ・日本でもおなじみのライオンやセブンイレブン、ローソン、サークルK、公文などもインドネシアに進出し、莫大な利益を上げている。 11:05 JETRO 出発

	<p>JABABEKA 工業団地</p> <p>Chiyoda</p> <p>S-Factory</p> <p>FJK</p> <p>プレジデント大学</p> <p>ホテル (ホテルNEO)</p>	<p>13:04 JABABEKA 工業団地視察。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アドバイザーの有本堯史郎氏から JABABEKA の概要について説明を受ける。</li> <li>・インドネシアでは、工場を建設する際には建設権が必要となる。</li> <li>・JABABEKA は 1989 年にインドネシア初の民間資本で創業し、現在約 5600ha、昼間人口 100 万人（日本の中京工業地帯と同規模）の工業地帯である。</li> <li>・JABABEKA では世界 30 カ国から 1600 社が操業している。（うち日本は 8%、124 社）、工業地帯内には大学、ゴルフ場、軍、警察、ホテル、病院、老人ホーム、リゾート地なども併設され、工業団地だけでなく一つの市として機能している。</li> <li>・製造業に携わり、10 年以上の営業経験がある 3 人の若手責任者の方々の話を伺い、工場を視察させて頂いた。</li> </ul> <p>14:58 Chiyoda 視察【自動車部品製造企業】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今年で進出 16 年目の企業で、現在社員は 150 名。“Tm Japan” といわれる日本での研修プログラムを利用し、今までたくさんのインドネシア人技術者を養成してきた。インドネシア人の職員の方々は 3 年間のそのプログラムの研修を受けていることもあり、非常に流暢な日本語で会話をしていた。</li> <li>・女性社員は事務勤務を行ない、男性社員は現場での仕事を中心に行なっている。</li> </ul> <p>15:35 S-Factory 視察【自動車部品製造企業】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インドネシアの問題点は物流が極端に悪いところ。人の流れも悪いので、片道 15 分の距離にあっても、実際は 1 時間以上かかってしまう。あいさつ回りは 1 日 2 回しかできない。</li> <li>・お客様から依頼を受け、一品一品製造している。機会一台につき一人の作業員が作業を行ない、コストと人件費の節約を行なっている。品質管理には力を入れているとのこと。</li> </ul> <p>15:55 FJK 視察【自動車用金型製造企業】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・FJK は、金型作りを行っている会社で、インドネシアに進出する際には、国内の 2 工場を閉鎖して、機材をインドネシアへ導入した。</li> <li>・主に日本の自動車メーカー向けの金型作りを行っていて、従業員数は 50 名である。</li> <li>・会社のモットーはインドネシア語にも翻訳し、スタッフに配布している。</li> <li>・‘Tm Japan’ から雇用したインドネシア人の社員が抱える日本人との協働作業に対する不安を解消するために、卓球やフットサルを行なって社員との交流を深めている。</li> <li>・‘5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）’を朝の朝礼の際に読みあげている。</li> </ul> <p>16:17 プレジデント大学視察</p> <p>プレジデント大学を訪問し、プレジデント大学の概要について、説明を受けた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学では、教育を施すだけでなくインターンシップへの参加を推進している。大学内には交換留学生も多く、中国人、ベトナム人、韓国人が多くを占めており、日本人は少ない。</li> <li>・日本との提携大学は今のところ早稲田大学のみである。</li> </ul> <p>20:30 レストラン「ネラヤン」にて夕食</p> <p>21:30 ホテル到着</p>
--	---	--



	ダルマプルサダ大学		<p>削減をした結果、インフラ整備（水道、地下鉄）が遅れた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本とインドネシアは防災について協力している。ワンセグを使って防災情報を国民へ伝える等。</li> <li>・パームオイル、ゴムなどのプランテーション農業が焼畑で行われており、温室効果ガス問題に直面しており、その対策として、自治体にも目標値を設定している。</li> <li>・貧困の割合が減ってきているが、40%以上が貧困層。</li> <li>・日本からは技術協力をしており、国交省から州政府にMRTに関する専門家を派遣している。また、環境教育や日本語教師の派遣もしている。</li> <li>・国、自治体、民間企業、大学等、協力するアクターが多様化している。</li> </ul> <p>12:50 レストラン「XO」にて昼食  16:20 ダルマプルサダ大学到着  16:16 ダルマプルサダ大学の大学生と交流</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・渋滞で約束の時間より1時間以上遅刻して到着したが、皆さん、温かく迎えてくれた。</li> <li>・ダルマプルサダ大学学生によるバリ島に関するプレゼンテーション発表。流暢な日本語でバリ島の文化、観光地、料理などを説明してくれた。</li> <li>・当派遣団員による北海道に関するプレゼンテーション発表、よさこい披露。学生は、とても興味を持って聞いていた。札幌雪まつりのちびまる子ちゃんの雪像やAKB48の写真では特に盛り上がった。</li> <li>・大学生の日本舞踊サークルのよさこい披露。完成度が非常に素晴らしく、団員一同、感動した。</li> </ul> <p>19:00 レストランへ移動  20:15 レストラン到着 大学生との懇親会。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バリ料理を食べながら学生と情報交換をした。</li> <li>・学生たちは、「日本で働きたい」「日本へ旅行したい」と目を輝かせて話していた。</li> <li>・記念撮影</li> </ul> <p>23:00 ホテル到着</p>
11/9(土)	<p>ジャカルタ市 独立記念塔</p> <p>インドネシア国立 博物館</p> <p>STC スナヤンプラザ</p>	<p>タクシー</p> <p>備上バス</p>	<p>9:00 ホテル出発  9:54 独立記念塔視察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ムルデカ広場」の中心部にある国家独立記念塔。市街の中心地に立つ高さ137メートルの塔で、ジャカルタのシンボルともなっている。1950年のインドネシア独立を記念して造られた。</li> </ul> <p>10:30 インドネシア国立博物館視察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・民俗に関する品々を中心に収蔵するインドネシア最大規模を誇る博物館で、ムルデカ広場の西側にある。</li> <li>・地域ごとに異なる家屋の模型や陶磁器、工芸品、伝統舞踊の仮面や衣装、ジャワ原人の頭蓋骨のレプリカなどが展示されていた。</li> </ul> <p>12:10 STC スナヤンプラザで昼食&amp;買い物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・巨大高級ショッピングモールで諸外国の有名なブランドショップが入っている。</li> <li>・物価も高めの商品が多い。地下の食品店では日本の食料品も高めの値段で売られていた。</li> <li>・レストラン街では、日本のお店もいくつか入っており、外国人客で賑わっていた。</li> </ul> <p>15:00 ホテルへ一時帰宿、日本の食品店「パンパイヤ」で買い物</p>

			<p>・パイヤは品揃えが多く、お客さんも多く来店していたので、日本の食料品への信頼、人気がかがえた。</p> <p>16:00 ホテル出発</p> <p>17:00 レストランにて夕食</p> <p>18:00 レストラン出発、空港へ向かう</p> <p>19:15 空港到着。各自自主行動</p> <p>21:25 JL726 便で成田空港へ</p>
11/10(日)	成田空港 新千歳空港	JL726 JL3041	<p>6:35 成田空港到着</p> <p>10:20 JL3041 便で新千歳空港へ</p> <p>12:45 新千歳空港到着、解散</p>





公益社団法人  
**北海道国際交流・協力総合センター**  
**HIECC/ハイエック**  
(旧 社団法人北方圏センター)

---

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center  
Hokkaido Government Annex West-7, North-3, Chuo-ku  
Sapporo, Hokkaido, 060-0003 JAPAN  
PHONE: +81 (11) 221-7840 FAX: +81 (11) 221-7845  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目(道庁別館12階)  
TEL: 011-221-7840 FAX: 011-221-7845  
URL: <http://www.hiecc.or.jp>  
E-mail: [hiecc@hiecc.or.jp](mailto:hiecc@hiecc.or.jp)